2 月 27 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　4：　35 – 41

「風はやみ、すっかり凪になった」

私たちの人生は、文字通り山あり谷ありです。嵐の日もあれば、凪の日もあります。山も谷もなるべく小さい方が良い。嵐なんて遭いたくない。できることならずっと凪でいてほしい。それは誰しも思うことでしょう。

ヨナは「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。」と神から命じられました(ヨナ書 1:2)。しかし、その思いを無視し、神の言葉を拒絶し、タルシシュ行きの船に乗りました。もちろん、神はヨナのその行動を赦されません。「主は大風を海に向かって放たれたので、海は大荒れとなり、船は今にも砕けんばかりとなった。」(ヨナ書 1:4)。

船中の誰もが恐れる中、「ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた。」(ヨナ書 1:5)。ヨナはこの嵐が自分のせいだと知っていました(「わたしのせいで、この大嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」ヨナ書 1:12)。だから諦めていたのでしょう。

しかし、何とか助かりたい他の乗員はくじを引き、状況を打破しようとします(「さあ、くじを引こう。誰のせいで、我々にこの災難がふりかかったのか、はっきりさせよう。」ヨナ書 1:7)。ヨナを犠牲にすれば助かると知って、乗組員たちはためらいます(「ああ、主よ、この男の命のゆえに、滅ぼさないでください。無実の者を殺したといって責めないでください。主よ、すべてはあなたの御心のままなのですから。」ヨナ書 1:14)。当たり前です。誰かを犠牲にした平安など、誰も望んではいません。

一方、イエスの弟子たちはどうでしょう。イエスの言葉に従って、湖に漕ぎ出したが、突風が起こり、舟が沈みそうになりました。その時、「イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。」(マルコによる福音書 4:38)。イエスは神に委ねておられたのでしょう。

しかし、弟子たちは不安からイエスを起こします。「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」(マルコによる福音書 4:38)との言葉には、「自分さえ助かれば」との心が透けて見えそうです。また、神の力が自分たちのために発揮されないのはおかしいという傲慢さも見え隠れします。

その思いを知った上で、イエスは風を叱り、湖を叱られます。すると風はやみ、すっかり凪になりました(「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、『黙れ。静まれ』と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。」マルコによる福音書 4:39)。

弟子たちのわがまま、身勝手な期待に応えられたのではありません。全ては神の救いを証しするためです(「この救いは、主が最初に語られ、それを聞いた人々によってわたしたちに確かなものとして示され、更に神もまた、しるし、不思議な業、さまざまな奇跡、聖霊の賜物を御心に従って分け与えて、証ししておられます。」ヘブライ人への手紙 2:3-4)。

荒れ狂った海はヨナを飲み込んで静まりました(「彼らがヨナの手足を捕らえて海へほうり込むと、荒れ狂っていた海は静まった。」ヨナ書 1:15)。しかしそれは、ヨナが犠牲になったからではありません。ただ神の力が示されるために起こった出来事ですから、ヨナは救われます(「さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。」ヨナ書 2:1)。そして、船に乗っていた人々は主を信じました(「人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。」ヨナ書 1:16)。

嵐であろうと凪であろうと、大切なのは神に全てを任せ、依り頼むことです(「主に依り頼む人は、シオンの山。揺らぐことなく、とこしえに座る。」詩編 125:1)。諦めるでもなく、焦るでもなく、じっと救いを待つ時、風がやみ、凪になるのです。信じて待ち続けることが、救いへの近道なのです。